群教セ	G05 － 07
	令5.284集
	図画工作

主題を膨らませ、自分なりに工夫して表すことができる児童の育成

――造形的な見方・考え方を十分に働かせることのできる指導の工夫を通して――

特別研修員　富山　亜紀穂

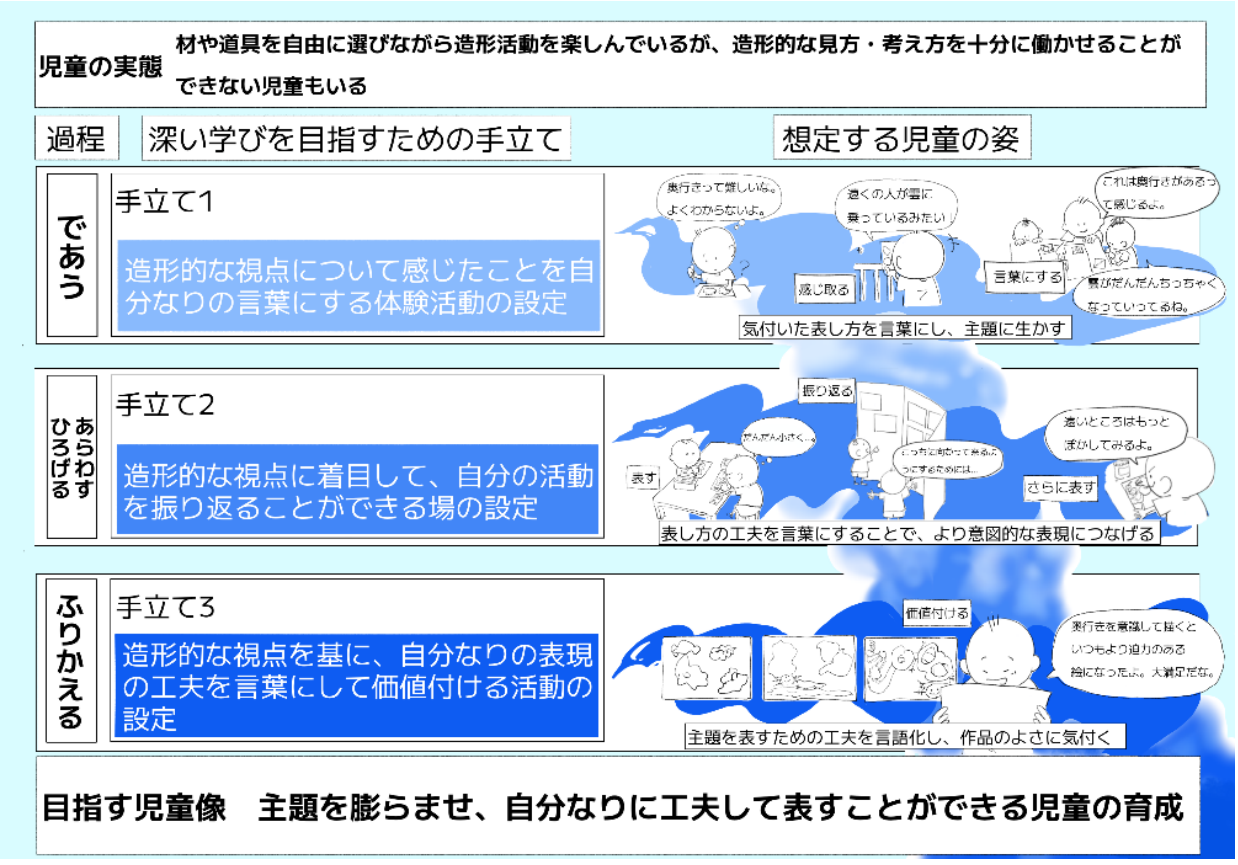
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説」図画工作科編では、活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせながら資質・能力を育成することを目標としている。造形的な見方・考え方とは「感性・想像力を働かせること」「造形的な視点で捉えること」「意味・価値をつくりだすこと」の三点であり、これらは図画工作科における深い学びを目指す観点であると言える。

これまでの授業では、児童の自由な発想と活動を保障する環境構成を行ってきた。授業後の振り返りの言葉を見ると、ほとんどの児童は自由な活動を好み、いつもそうあればよい、という思いをもっていた。しかし、教師が自由を重視するあまり、児童の活動に対する介入を避ける傾向が強まった。児童の自由な活動を許容するだけでは、造形的な見方・考え方を十分に働かせているかを見取るには弱く、深い学びを実現しているとは言いがたかった。

そこで、ねらいとする造形的な視点を中心とした学びの深まりを目指した題材構想を行い、造形的な見方・考え方を十分に働かせながら、自分の思いを表現することができる児童を育成することを研究テーマとして設定した。

Ⅱ　研究内容



２　授業改善に向けた手立て

造形的な見方・考え方を十分に働かせながら自分の思いを表現する児童の姿とは、次の三つの姿である。対象や事象から感じ取ったことを言葉にして捉え直している姿。造形的な視点を基に活動を振り返りながら表現している姿。そして、活動に自分なりの意味付けや価値付けをしている姿と考える。こうした姿を引き出すためには、題材における造形的な視点を学習過程の中で繰り返し意識できるようにする手立てが有効であると考え、以下の手立てを実践していくこととした。

手立て１　造形的な視点について感じたことを自分なりの言葉にする体験活動の設定

題材のねらいに合わせて、見付ける、まねをする、遊ぶなど五感を使った体験活動を行い、造形的な視点に気付く。そして、体験を通した気付きを基に友達と交流しながら自分なりに言葉にしていくことで、感覚的に捉えたことを自分なりに理解して主題に生かすことができるようにしたいと考えた。

手立て２　造形的な視点に着目して、自分の活動を振り返ることができる場の設定

友達と交流しながら、造形活動を振り返ることのできる環境を設定することで、児童が題材における造形的な視点に着目しながら、自分なりの表現の工夫を追究できるようにしたいと考えた。

手立て３　造形的な視点を基に、自分なりの表現の工夫を言葉にして価値付ける活動の設定

題材を通して、児童が自分の主題や考えを表すためにしてきた工夫について、自分なりの言葉で振り返ることのできる活動を設定することで、作品や活動に自分なりの意味付けや価値付けができるようにしたいと考えた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　光や奥行きなどに着目できるよう、五感を使用する遊びを取り入れた体験活動を設定することで、造形的な視点を感じ取る児童の姿が見られた。また、その後の交流では、感じたことを自分なりの言葉にすることができた。具体的な言葉にできたことで、気付いた配置や配色を再現しながら主題を膨らませようとする姿につながった。

○　つくる場と見る場を行き来できる環境を設定すると、作品から離れて主題が効果的に表現できているかどうかを確かめる児童の姿が見られた。また、教師や友達と一緒に振り返ることで対話が促され、表現の意図を自分なりの言葉で整理することができた。そして、その後の活動では、より意図的な表現につなげる児童の姿が見られた。

○　主題を表す意図について説明する活動を設定すると、主題を実現するための意図的な工夫を改めて言葉にする姿が見られた。言葉にしたことで、造形的な視点を意識した表現をすると作品のよさが増すことに気付き、自分なりの価値付けをすることができた。

○　自分の表したいことや思い、主題を膨らませる際に、児童が感じたことを自分なりの言葉に表すと、造形的な視点について感じたことが整理される様子が見られた。そして、表す際には、児童が造形的な視点について言葉にしたことを、自分なりの表し方の工夫に生かす様子が見られた。これらのことから、言葉にする活動を通して自分なりに解釈を深めていくことは、児童が主題を膨らませたり、自分なりに工夫して表したりする姿につながることが分かった。

２　課題

○　体験活動において、児童の感じ取っていることがねらいとする造形的な視点に向かっているかを適切に見取る必要がある。

実践例

１　題材名　　「雲をのぞいたその先に」

２　本題材について

本題材は、雲の配置を工夫して奥行きを表す造形的な視点を基にし、雲の向こう側に見えるものや景色を想像して絵に表す学習である。本題材では、モデリングペーストなどの下地材で一番手前の雲を描くことで、雲に隠された向こう側が表現しやすい。また、日常的に見慣れている空から、何が見えたらおもしろいかを想像する楽しさがある。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	ア・雲の向こうに見える景色を自分なりに表現する活動を通して、配置や奥行きの造形的な特徴を理解できる。 ・雲の配置を工夫して自分なりに空の奥行きを表現できる。（知識及び技能） イ・配置や奥行きなどの造形的な特徴を基に、空の向こうに見えるものを自分なりに発想できる。 ・配置や奥行きなどの造形的なよさや美しさを感じ取ったり考えたりしながら、見方や感じ方を深めることができる。（思考力・判断力・表現力等） ウ・雲の向こう側を想像することを楽しんだり、空を表現する学習活動に進んで取り組んだりすることができる。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)・雲の向こうに見える景色を自分なりに表現する活動を通して、配置や奥行きの造形的な特徴を理解している。［知識］ ・雲の配置を工夫して自分なりに空の奥行きを表現している。［技能］ (2)・配置や奥行きなどの造形的な特徴を基に、空の向こうに見えるものを自分なりに発想する。［発想・構想］ ・配置や奥行きなど造形的なよさや美しさを感じ取ったり考えたりしながら、見方や感じ方を深めている。［鑑賞］ (3)・雲の向こう側を想像することを楽しんだり、空を表現する学習活動に進んで取り組んだりしようとしている。［態度］

過程	時間	主な学習活動
出会う	第１時	・空の映像を見たり、雲フィルムをつくってのぞいたりする活動を通して、雲の向こう側のイメージや題材の見通しをもつ。
試す 広げる 表す	第２	・雲の配置と奥行きに着目しながら、友達と空の写真を分類する活動を通して理解を深め、雲の配置を確かめながらアイデアスケッチをかく。
	第３～６時	・配置と奥行きに着目しながら、自分なりに表したい空を表現する。 ・雲の配置に着目しながら、下地材で一番手前の雲を描く。
振り返る	第７時	・配置と奥行きに着目しながら鑑賞し、学習活動を振り返る。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全７時間計画の第１・２時に当たる。児童が雲の配置と空の奥行きを捉えながら自分の思いを表現できるよう、次のような手立てを具体化した。

手立て１　造形的な視点について感じたことを自分なりの言葉にする体験活動の設定

雲フィルムから奥の景色を覗く体験活動を通して、奥行きを感じ取らせる。また、複数の空の写真を、奥行きに着目して交流しながら分類する活動を行い、自分なりの言葉で伝え合うことで造形的な視点への理解を深める。

手立て２　造形的な視点に着目して、自分の活動を振り返ることができる場の設定

児童の自然な交流を促す机の配置と、つくる場と見て確かめる場を行き来しながら意図的に交流する場の設定を行う（図１）。奥行きを意識しながら思いを表現できているかを振り返らせ、自分なりの工夫を見付けられるようにする。

手立て３　造形的な視点を基に、自分なりの表現の工夫を言葉にして価値付ける活動の設定

自分が表した空の奥行きに着目して、作品で表現したかったことを振り返る活動を行う。また、奥行き意識しながら思いを表現していくことのよさに触れ、活動や作品の意味付けや価値付けを行えるようにする。

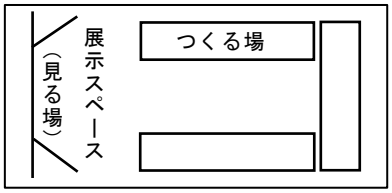


図１　場の設定

４　授業の実際

【出会う過程】

手立て１　造形的な視点について感じたことを自分なりの言葉にする体験活動の設定

第１時では、雲に見立てた紙粘土を透明フィルムに貼り付けて雲フィルムをつくった。抽出児は、雲フィルムから周囲を覗いて見ることで、雲が重なると「奥にいる人が見えなくなる。」と発言した。また、遠くの人が雲に乗っているように見える様子を「筋斗雲だ。」と見立てた（図２）。

図２　奥行きを感じ取る

第２時では、複数の空の写真を、奥行きに着目して交流しながら分類する活動を行った（図３）。交流中、抽出児は「雲が重なっている。」や「手前の雲が大きく、奥はだんだん小さくなっている。」と発言した。その後、ウーパールーパーのアイデアスケッチに、雲が重なるように雲フィルムをつくりかえていた。

図３　交流し分類する

雲フィルムを覗いて見る体験の中での「筋斗雲だ。」という発言は、抽出児が「手前の雲に遠くの人を重ねる。」という奥行きを感じ取っている姿であると考える。また、雲が重なるように雲フィルムをつくりかえた姿は、言葉にすることによって自分なりに奥行きの理解を深め、表し方の工夫として生かそうとした姿であると考える。

【試す・表す・広げる過程】

手立て２　造形的な視点に着目して、自分の活動を振り返ることができる場の設定

第３時の導入で前時を振り返り、参考作品を見た抽出児は「龍の体も雲の大きさに合わせて小さくなっている。」と言葉にした。その後、雲をだんだん小さくする配置にこだわり、雲フィルムを何度もつくりかえた（図４）。配置が決まると、ウーパールーパーをモチーフにした龍（ウパ龍）がだんだん近付いてくるように、アイデアスケッチを描きかえた。下書きも雲とウパ龍の体の配置にこだわって何度も描き直したため、他の児童より進みが遅かった（図５）。

図4　雲フィルムをつくりかえる

図５　下書きを修正する

第５時では、途中の作品を展示し交流する活動を行った。抽出児は、自分の作品を離れた場所から見ながら、奥行きを表すための工夫として教師や友達に「雲で体が見え隠れしているようにした。」と話していた。また、「雲の隙間に見える体がいきなり太くなっているから違和感がある。」と、次の活動に向けての改善点を見付けていた。

その後の活動では、空の塗り方に悩み、教師と共に実際の空を見ながら「手前の色が濃く、遠くは薄い」という色の違いに気付いた。抽出児は、隣の友達が余分な絵の具を布で拭き取りながら塗っている様子を見ていた。そして、ティッシュで拭き取りながら濃度を調節することを思い付き、自分なりに工夫して塗っていた（図６）。塗り終わると再度展示スペースで確認しながら「輪っかの雲の向こうは奥だから薄く塗った。」「半透明のひれから空の色が透けるようにした。」と塗り方の工夫を教師に説明していた。その後、下地材を選ぶ際に「（厚みのある）モデリングペーストは、遠くの雲に合わない。」と話した。理由を問うと、「遠くの雲は薄いから体が透ける。」と、奥行きを表すためには雲も濃淡を意識する方がよいと考えていた。下地材を選択した後は、「手前ははっきり、奥はぼんやり透ける。」という自分で気付いた表し方の工夫を生かすために、材料や道具を変えながら自分なりに表していた（図７）。

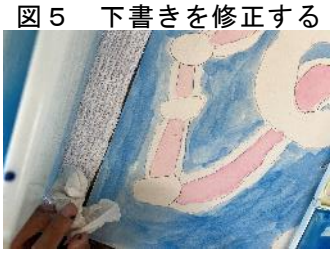


図６　塗り方の工夫

図７　材料や道具を工

展示スペースでの交流で見られた「違和感がある。」という発言は、作品から離れて振り返ることで、抽出児がより奥行きを表すための視点に気付いた姿であると考える。また、作品を再度展示スペースに持って行き、絵の具の濃淡で奥行きを表したという工夫を言葉にした。その後、下地材を塗る際に同様の工夫を行っていることから、言語化したことを意図的に生かすことができた姿であると言える。

【振り返る過程】

手立て３　造形的な視点を基に、自分なりの表現の工夫を言葉にして価値付ける活動の設定

図８　工夫を説明する

抽出児は、作品名を決める際「ウパ龍が遠い空の向こうからだんだんと近付いて来る作品名にしたい。」と話し、しばらく悩んでいた。友達といくつかの候補を相談し、「突撃ウパ龍」と名付けた。振り返る場面では、奥行きの表し方を基に作品を見合いながら、自分の作品について説明する活動を行った。抽出児は友達に「（雲から）見え隠れするようにしたから奥行きを感じる。」と雲に穴を開けた理由を話していた。また、２種類の下地材を使った理由を問われ、「はっきり見えるものと薄く透けるものを使い分けた。」と話した（図８）。振り返りのワークシートには、完成した作品の満足度を10点中９点と付けていた。また、活動のよさとして「絵は奥行きを理解してかくと普通の絵より迫力が出てかっこよくなる。」と記述していた（図９、図10）。

作品の説明をしながら表現の理由を話した姿は、主題を表すために自分が意図的に行ってきた表し方の工夫を改めて捉え直している姿と考える。自己評価が高いことや「奥行きを理解してかくと迫力が出る」といった記述は、自分の活動や作品に対して意味付けや価値付けを行っている姿であると考える。

図９　完成した作品

◎配置と奥行きを理解して描くと、自分の絵のよさや描く時の考え方はどう変わっていきましたか？

奥から手前にするとどんどん近付き迫力が出せる絵となることが分かった。
絵は奥行きを理解して描くと普通の絵より迫力が出てかっこよくなる。

図10　抽出児の振り返り

５　考察

「出会う」過程において、奥行きに着目できる体験活動を設定することで、本時で捉えさせたい奥行きを感じることができた。また、言葉で伝え合うことで、意識させたい手前と奥についての視点を自分なりの言葉にすることができた。その結果、児童の主題である「遠くからこっちに向かってくるようなウパ龍」へと発想を膨らませることができたと考えられる。

「試す・表す・広げる」過程において、つくる場から見る場に持って移動できる場づくりをしたことで、主題を十分に表せているかどうかを離れて確かめることができた。また、友達や教師と一緒に振り返りながら、主題や表現の意図を言葉にすることができた。対話によって説明が促された後の活動では、表現がより意図的なものになったと考えられる。

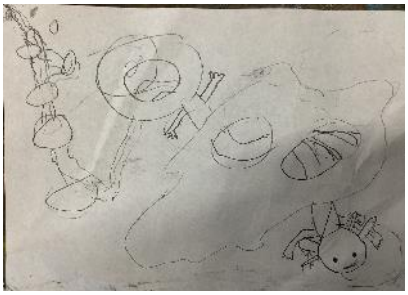
「振り返る」過程において、「突撃ウパ龍」という作品に込めた主題や奥行きを表す意図を説明する活動を設定することで言語化が促された。奥行きの表現を意図しながら描いた「ウパ龍」には、遠くからどんどん近付いて来る迫力がある、と気付く姿につながったと考えられる。

6　資料

抽出児の作品の変容

第１時

第２時



第３時

第４時

第５時

第６時

抽出児以外の児童作品

奥に向かってだんだん小さくなる配置による奥行きの工夫

重なりによる奥行きの工夫

隠したり、ぼかしたりする奥行きの工夫

雲の大小による奥行きの工夫